

神に近づきまなされ

松下昌義

みちしるべ文庫 十六号

「神に近づきなさい」

一九九六年十月十五日発行

著者 松下昌義

発行所 左京キリスト教出版部

京都市左京区下鴨南茶の木町二九

1 本当に幸いになりたければ財産を捨てなさい。欲を捨てなさい。と聞くことがありますが。しかし、ただ捨てれば幸いになるわけではありません。むやみに捨てれば、かえって不幸になり、後悔ばかりが残ります。

わたしたちが捨てなければならぬのは、「ものごとに対する誤った見解と過度な期待」です。

「誤った見解」とは、間違つたものの見方のことです。自分が正しいとしている「ものの見方」は、多分に自分に習慣となつて見方です。そのような習慣化された見方でものを見ていることが、自分の外なる世界と自分との関係を作つていゝので、大切なことは、自分がはたして、物事をありのままに見て関わつていゝかということに反省することです。

2 神さまは、人間に二つの目を与えて下さいました。それは、二つの目でものを見るためであります。二つの目でものを見ると、そのものが立体的に見えます。それは、そのものの奥行が見えるということです。

奥行が見えるとは、そのものの奥深さが見えるということです。

奥深さが見えてくると、その人は決してどのようなことも、一意的、一義的に断定することは無くなり、さまざまな側面から判断しようとし、自分の判断だけを確かなものとして固守しようとせず、相手の言葉に耳を傾けるようになりましょう。片方の目だけでものを見るとき、ものごとがすべて平面的に見えてしまいます。神さまは、ものを奥深く見るために、私たちに二つの目を下さったのです。はたして、私たちは心に二つの目をもってものを見ているでしょうか。

### 3

人は人、私は私であります。この距離は縮まっても、決して一つになることはありません。人と私との距離を、よく弁えておくことは、人と正しい関わりをもつための知恵であります。

人が私と一つになり、私が人と一つになる。つまり完全に互いに理解しあつて一つになれる、と考えることは安易な楽観主義であり、幻想であります。

人はひとでありつつ、私はわたしでありつつ、限りなく相手を理解しようとし、協

力するところに、人との最も善い関係があるのです。夫婦や親子の関係に於いても同じです。

なにごとに於いても事実以上の過度の期待は、失望に終わります。限られた人であることを神の前に認め、謙虚と愛をもって協力することが大切です。

4 友達や夫婦の関わりが、上手くいつていると思われる場合、ときとして、そのどちらかが、相手に倍して「耐えている」ことがあり、それに気づかない間に、「耐えている」者が、耐えきれなくなつて、その関係が崩壊してしまうことがあります。

しかし、「ただ耐える」というだけでは関係を創り挙げていくことは出来ません。問題を相手にぶつけるということを通して話し合うなら、互いに気づくことが沢山あります。特に夫婦の場合はその積み重ねによつて、関わりが深められていきます。互いに何も言わずに「自分だけが耐えている」と思つていては、その人間関係は建前だけのものとなり、なにかの弾みで簡単に崩壊してしまいます。

より良い人間関係は相手を謙虚に理解しようという姿勢によつてつくられていくも

のです。

5 私たちは、さまざまな「もの」や「こと」を身にまとい、それらを引きずって生きています。悲しみや怒り、悔いや恨み、義理や情絡みのいろいろな思い、そして不安、嫉妬、嫉み、数え上げれば切りがなく、それらが、今も自分に直接または間接に影響し、生活に薄暗い陰をおとしているのを覚えます。

このような時、自分をスッキリさせたいと思います。そのために大切なことは「思いを断ち切る」ことです。引きずっているからスッキリしないのであって、断ち切つてしまえばよいのです。

断ち切る為にはどのようにすればよいのでしょうか。パウロは次のように言います。「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリストによつて上に召してお与えになる賞を得る為に、目標を目指してひたすら走ることです。」(ピリピ 3・13)

後ろを向いては断ち切ることは出来ないでしょう。また現在に止まっても

断ち切る事は出来ません。前に向かって大いなる希望を神さまから頂くとき、後ろのものを断ち切れるのです。

6 何事にも、必要以上に気負ってことにあたると、長続きしないだけでなく、いろいろな問題がおこります。

人生のことはゆっくりと、しかも確実に一歩一歩進めて行くことが肝心です。学び、求道、付き合ひ、技術の習得、その他のすべてに於いて、共通していることは、急がず焦らず自分の歩調で確実に続ける、ということ、それは染み込む状態であり、醸造する様子に似ています。ふと、気がつくとしっかり自分の身につけていた、ということになります。そのことをよく知っている人は、「待つ」ことが出来ますし、「待つてあげる」ことも出来ます。

また、気負うと、相手や周囲が見えなくなつて、当の人の思いだけが渦巻き、たとえ親切心から出たものであつても節度なき行いとなつて、人々から疎ましく思われてしまいます。そのことに気づかぬ当の人は「私はこれだけしてあげたのに」という不

満が残ることになります。

互いに気負うことなく事にあたりたいものです。

7 目に見える肉体だけでなく、目に見えない心（魂）というものが自分の内に働いていて、自分は支えられているのだ、ということに気づくことは、簡単なようで、難しいことです。

魂（心）は、知、情、意として私たちの内で働いていますが、その魂の働きの更に奥において、霊という、これまた見ることが出来ない働きがあるのです。

若い時は肉体にものを言わせて生き、中年になると魂にものを言わせて生きますが、壮、老年になりますと、それだけでは満足出来なくなつて来ます。所謂、中年の惑い、焦り、壮年の不安、生き甲斐の喪失、虚無感、老年の絶望。それは、自分の内の靈性の欠如とそれを求める症状なのです。

私たちの人生は、結局、自分の内に靈性の満たしを得て、完成するのだということ、しっかりと心得ておくべきです。



イエスさまの御復活を学ぶことは、自分の復活を学ぶことであります。そして、自分の復活を学ぶことは、自分の死を学ぶことです。さらに、自分の死を学ぶことは、自分の生を学ぶことです。

私たちは、自分に関わる外の出来事には強い関心をもち、いろいろと思い考え、対処するように努力しますが、自分自身に起こることがらには、ほとんど真面目に目を向けません。例えば、「自分が死ぬ」ことよりも「他人の死」について語ることが多いです。

「他人のことやと思うたに、自分が死ぬとは、こりやかなわん」という狂歌がありますが、私たちが自分自身の最も身近で重大な事実には、思いを向けることを忘れていることに、はつとさせられます。

「人間には、一度死ぬことと、死んだ後、裁きを受けることが定まっている」という聖書の言葉は、私たちを生きている現実に引き戻してくれます。

その現実に立って、イエスさまの復活を学び、思いめぐらすとき、自分の生と死。そして人生の意義や希望や安心がどのへんにあるのかということが見えて来るのではないでしょうか。

9 自分が自分自身を見ている目より他人が自分を見ている目のほうが確かだといえます。自分では気づかない、自分の善い点、悪い点を知っているのは他人です。この場合、正しく他人を見ている人は、そのことについておおくの場合寡黙です。べらべら語る人は、自分を語るが、寡黙な人は、相手を語ります。

寡黙な人は知らないから語らないのではなく、知っているので語らないのです。神さまは、すべてを知っているので極めて寡黙です。

10 「私は達したと言うのではない」とパウロは言いましたが、信仰者とは一生求道者であります。しかし信仰者の求道は、すでに神の愛のなかに抱かれていることを知っているその感謝とお恵みとに、促されてなされる事であります。その意味で、信仰者はいつも不完全なそのままに神に抱えられている者です。

11 我慢して赦すのではなく、大きく相手を包むことです。相手より自分を大きくする

ことです。大人は幼児と喧嘩はしません。幼児が自分よりすべての面で小さな者であることを知っているからです。

相手と対等に立つとき、相手の失礼、無礼に腹立たしく思ってしまう。しかし相手より自分をはるかに大きな存在に自分を成すとき、傲慢でなく謙虚になって、相手を包むことができるようになります。キリストを知り、神を信ずる信仰は、そのよ  
うな大きな存在に人をかえます。

12

喜びは自分の外から来るものでなく自分で見出だすべきものです。

どんなことでも、もんくをつけ不満に思いだしたら切りがありません。そのような人は、いつもいつも不平ばかり言い、不満顔をつくり、自分と自分の周囲に対して、暗い想念をまき散らしています。そのような人は、喜びは自分の外から来るものだと  
思い込んでいます。

しかし、喜びは外から自分に来るものではなく、自分で見出だすものであり、見出  
だす知恵に欠けている人は一生喜びを得ることは出来ず、文句ばかり言っ過ぎてすこ

とになります。その気になれば、喜びは自分の生活のどこにでも見出だすことが出来ます。幸福な人とは、喜びを自分の日常の生活に見出だせる知恵を持っている人です。神さまを信ずるとか、信仰を持つとかいうことは、そのような生活の知恵を自分の身にいたいただくことであります。

13

私たちが生きていることの基盤は、私たち自身にはないとよく言われますが、最近の雨不足による渇水は、そのことを具体的に教えてくれています。

水は人間の技術によって浄化された水道から出てくるものでなく、元をたどっていきますと、天から降って来る「雨」に、その殆どを依り頼んでいることに、改めて気づかせられました。

たかが水、されど水であります。湯水のごとく、いつでも、どこにでも無償であるのが水だと思っていますが、考えてみると、その水が無ければ人間は生きていけません。勿論植物を含めた生物全体が在ることが出来ないのです。社会的な生産活動ができないとか、トイレや風呂などに不便が生じるなどという次元のことではないのだと

いうことにも気づきません。

水系が変わってしまったって、一つの都市や文明までが消え、滅んでしまったという話  
はよく聞きます。水のある無しは、地球の存亡に関わることです。

とにかく、私たちが生きることが出来るのは、私たちの意志や知恵にその基盤があ  
るのでないことを、改めて、雨不足ということだと思い知らされました。テレビが、方  
方で雨乞いの神事を行ったということだを報道しています。

#### 14

褒められることを求めるより、助言をしてくれることを求める人は賢い人です。

必要な時に、それに相応しい助言をしてくれる人はとても少ないように思います。

やたらに同情したり、共感したり、褒めそやしたり、あおりたてたり、ときとして無  
責任に共鳴する人は多くいます。

私たちは、助言してくれる人よりも、自分を褒めそやす人の方に好感をもつことが  
あります。

褒められてばかりいると、反省の時をもつことを忘れてしまいます。間違った道を

歩いている自分に気づくことができせん。しかし、助言をしてくれる人は人を立ち止まらせ、自分の姿に目を向ける時を与えてくれます。

助言をしてくれる友を持つ人は幸いな人です。さらに、助言に謙虚に耳をかたむける人はもつと幸いな人です。

15 自分は心が豊かな者だと思つているし、そのように思いたいと願つているのが、私たちです。でも、本当に自分は心豊かな者として生活をしているのだろうかと思つると、少し自信がありません。

心の豊かさというものは、ただ考えているだけではわかりません。

自分に必要な物が満たされ、願いが大体において叶えられている条件のもとでは、誰でもこころ豊かに過ごせましょう。しかし、必要とする物が満たされず、自分の願いが叶えられないでいる状況に自分が立たされたとき、落ちついて対処できなければ、その人は、こころ豊かな人とは言えません。

それにしても、少しお腹が空いただけでいらいらし、ささいな願いが叶えられ

ないだけで、不機嫌になり周囲にあたりちらす自分を見ると、本当の自分を見たような気がするのは、大方の人が体験することです。

16 私たちは、生きている者ではなく生かされている者です。生かされている場所や立場は、それぞれ異なりますが今、生かされている境遇は、よく考えてみますと、自分が選んだのでなく与えられたものです。

自分がどこに立たされているかは、さほど重要なことではありません。ある人は頭、ある人は手、足や目……………いろいろな境遇がありますが、そこで大切なことは、それぞれの境遇は、自分の魂を聖め、靈性を光り輝かし、次なる人生へよく進む為の「方便」であることを弁えておくことです。そのことを知らないまま、自分の境遇に溺れて、高ぶったり、卑屈になったりするなら、その人は自分自身を殺してしまいます。自分の境遇でよく生きるための人生の秘訣がここにあります。

17 いつも身近にイエスさまを覚えて生活することはとても大切です。それは、時を定めて、祈りに専念するよりも、私たちの生きる支えとなります。

いつも祈り、絶えず喜び、どんなことにも感謝する。という生活は決して難しいことではありません。

いつも祈らねば、と思うとき、祈りは重荷となりましょう。絶えず感謝し、喜ばねばと思うとき、そのような生活が出来ない自分に挫折してしましましょう。

祈ること、感謝することは義務でも責任でもありません。義務や責任で自分を縛ることは、一時は出来ても、途中で「しんどく」なってしまいます。イエスさまと、気楽に一緒にいる気分で生活してみましよう。親しい友達と気楽な気分で、おしゃべりをしているときのような気分で「よろしく」「ありがとう」「すみません」と話しかけることが祈りの生活です。

18 悪口と批評とは違います。批評はその人や事柄についての見解であって、大いに語り、互いに真剣に討論してよいことです。しかし悪口は見解ではなく、その者や事柄



に對する悪想念から出て来た言葉です。その悪想念はときとして「ねたみ心」から生まれてきます。

悪想念から出た言葉は、後に救いようのない暗さを自分にも人にも残します。しかし、見解としての言葉は反省と希望とを残します。

はたして、私が今日語つた言葉は「悪口」か「見解」だったのか。

19

語るべき時に語らず、語らなくていい時に語る。ことがあります。また、語るべきことを語らず、語らなくてもよいことを語るといふこともあります。

はたして、私たちは、この事について、どのような語り方をしてるのでしようか。私たちが、神さまの御愛に出会つたきつかけを取り次いで下さつた人のことを思い出しましょう。

私たちは、自分の思いで、語るべき事、語るべき時を、自分の周囲にいる人に対して失っているのではないかと、省みることは大切です。

20 「きっかけ」という言葉があります。それは、ある事をするはずみや手がかり（になるもの、なること）、をいう言葉です。

人生に於ける出来事の多くは、なんらかの「きっかけ」によつて起こります。「あの一言」「あの出会い」「あそこでの出来事」などを思い出すとき、「きっかけ」の重さと不思議さと有り難さを思います。

「時がよくても悪くても御言葉を語りなさい」とパウロはすすめましたが、神さまとの交わりの「きっかけ」になる言葉を人々に語る者でありたいです。

21 人間関係にかかわるどのような問題も、その原因をたどっていくと、「他人のことを思いやらない自分中心の態度」にたどりつきます。

故意になす「利己主義的態度」は論外です。問題は、その人自身は気づいていない、その人の「独断や偏見による態度」であります。一般的な言葉で言えば「相手に対する思いやりがない態度や言葉」ということになります。こういう人はだいたい原理主義者、合理主義者、理屈屋さんに多いようです。知らない間に相手の心を傷つけ、不

愉快な思いにしまつていゝのです。

大切なことは、どのような場合でも、まず、相手の言葉を受け入れ、肯定することから始めることです。つまり、相手への「思いやり」「優しさ」で始めることです。正に「聞くに速く、語るに遅く」の態度こそ、人間関係を丸くさせる秘訣です。

22

「兄弟たち、あなた方自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒め合うことが出来ると、私は確信しています。」とパウロはローマの教会の人達に言いました。信仰に於ける交わりの基本には、互いにこのような確信と信頼とが必要であり、このような互いに信頼し確信し合うことが、「信仰に於ける交わり」なのだと言えましょう。

人と人との関わりに愛があるとはこういう交わりのことです。

23

疑いの中からは善き事は生まれて来ません。善き人間関係は愛による関係ですが、

その愛は相手を信じることに於いて完成するのです。表面はどうであれ、人間の深奥に働いている神さまから頂いている靈性を信じるのが、人間を信じるということです。イエスさまの生涯は人間を徹底的に信じ通すことによつて、眠りこけている人間の靈性を揺り起こされました。徹底した愛だけが人に愛を取り戻す創造的業をなし得るのです。その意味で、イエスさまの十字架の愛こそ、人を新生させるのだと言えます。恨みより尚大きい愛を持つとう。愛はすべてを結ぶ帯であり、愛はすべてを覆う傘であります。愛だけが、一切の不安と悲しみと怒りとを取り除くことが出来るのです。

24

何か特別な行いが神さまの栄光を現す事ではありません。毎日の生活、自分に与えられた務めを一生懸命にはたすことが、神さまの栄光を現しているのだということに気づきましょう。

自分の何かを特別に捨てること、日常と違った特別な何かをすることが、神さまの栄光を現すことだと思ふなら、その人は、その時から自分の生き方に悩みや戸惑い、焦りが生まれてきます。特別な何かをすることではなく、日々の生活そのものが、神

の栄光を現す場所なのです。そのとき生活する意義がわかるようになります。

25 それ自身に自己否定を含んでいない思想は、どのようなものであれ真実なものではありません。自己否定とは自己の限界を自覚している精神のことであり、簡単に言えば、謙虚な心を持つことです。別な表現をすれば、超越者に対する畏れの念を深く持つことです。個人に於いても集団に於いてもこの心が無くなる時、自分を神とする悪魔的な個人や集団となるでしょう。

26 世間に在って名声を求め、尊敬を得、権力をふるい、称賛に与かろうなどと思つてはなりません。それらは、願うことではなく、世間が与えてくれるものです。与えられたものは、深い思慮と徹底した謙虚さ、神への感謝の念をもって受けるべきです。どのような場合でも、決してそれらに執着してはなりません。執着心は滅亡への陥あなどなるでしょう。欲が孕んで罪を生み、罪が熟して死を来たらせます。

「祈れません」とか「感謝できません」などと言う人がいます。そういう人は「祈れない」のではなく「祈らない」のです。なぜ祈らないのかといいますと、祈るしか他ない程の、限界状況に立っているのが自分自身であることに、まったく気づいていないからです。「人間と言うものは限りのある者です」などと、口では言いながら、その実、そのような現実感覚が欠落してすべてを理屈のこと、観念的な遊戯の世界のこととしているからです。徹底した「罪意識」を自分に持っているなら、「祈れない」などと悠長な戯言は言えません。思わず、手を合わさせられているのです。絶望してなお、自己自身であるような絶望がある。とキルケゴールは言いましたが、「絶望」「絶望」と言っているのは、所詮は自我からのものであって、本当は何も絶望などしていないのです。それは一種の自我の知的遊戯にしかすぎません。徹底した罪意識は、徹底した謙虚を生み、その謙虚は祈りと感謝とに自ずとその人を導いて行くでしょう。

この度の「オウム教」の事件によって、多くの人々はあらためて「宗教」という事に関心を向けたようです。しかし、正しく「宗教」について考える機会になったかと

言いますと、必ずしもそうではありません。と言いますのは、今日殆どの人々が「宗教」についての正しい見識を持っていないからです。

人間にとって「宗教的な精神性」というものは絶対に必要であり、それが欠落してしましますと、この世に於ける人間の倫理性は、その根拠を無くしてしまいます。例えば「なぜ正しく生きねばならないのか」という正しさの根拠が無くなるのです。「自分がしたい放題にしてなにか悪いのか」ということになってしまふでしょう。

正しい「宗教心」は生きることに対する責任と畏敬の念を、見えない超越者に対して、人の精神に覚えさせます。それによって、人間が人間らしくならされるのです。しかし、今日、宗教を、自分の利欲のための道具ぐらいにしか認識していない宗教家や信徒が多くいるようです。

どのようなものであれ、自分の貪欲を満たすための道具と化すとき汚れはじめます。自分の貪欲を満たそうとする働きをするのが利己的な自我です。利己的な自我の関心は、自分だけ、ということですが、自分がとって利益にならないことには無関心になります。その利益不利益と判断する価値尺度も利己的な自我がつくるのです。正義も、幸福も、善も、悪も、真実も、愛も、神も……とにかくすべてを自分

中心の尺度で作り上げるのが利己的自我です。言うならば、自分自身を神とするのが利己的自我の実態です。

このような利己的自我は、特定な人にだけあるのではなく、誰もが持つています。神を語り、謙虚な信仰に生きる人が実は、利己的自我が作り出したその神、その謙虚であり、善や愛にしかすぎない、と言うことだつてあるのです。「彼らは神について熱心であるが、それは深い知恵によらない」とイエスさまが言われる「熱心」こそ、利己的自我なのです。私たちにとつて根本的な問題は利己的自我です。

利己的自我と自然的な欲望とは違います。一切の欲望を断つことと利己的自我を放棄することと同じとし、そのような無欲な自分になることを、人間の理想とするなら、それは誤つた禁欲主義であります。そのような禁欲主義的理想を自分に課す、その事自体が、実は利己的自我そのものなのです。

利己的自我はいつも理屈でものごとを捕らえ、理屈でものごとを考え、理屈で結論を出そうとします。利己的自我の正体は「理屈で擱もうとすること」なのです。

素直さということは、ありのままを受け入れ、ありのままを生きる姿です。そこに理屈はありません。天地の営み（命のたぎり）と同一化して生きる生き方こそ、神



さまと共に生きる姿なのです。そのような人は何が第一であり、何に感謝し、何を喜ぶべきかを自分の一番深い所で弁え知っています。そのような人の生活には祈りが自然にあります。

人の内に働く欲望が悪なのでなく、感謝と祈りとを伴わない欲望が悪であり、利己的自我そのものなのです。

29 私たちは自分の内にある「靈性」を活性化しなくてはなりません。自分の表面の感覚と利己的な知恵ばかり働かせて、自分の外の世界だけに関心を向けていますと、自分の内に語りかけて来る神の声を聞くことは出来ません。神さまは、この世のすべての事柄を通して私たちの靈魂に語りかけておいでになります。神の慈愛や力を、目の前に咲いている花に於いて、囀る鳥の姿において、朝の目覚めにおいて、食事が出来るそこに於いて……私たちは神さまの慈愛の庭に住まわせて戴いているのです。だのに、その慈愛に無関心であり、その声が聞こえず、見えず、感じないのは内なる「靈性」がまどろんでいるからです。

聖書は、私たちの内なる「靈性」を目覚めさせる言葉です。礼拝に於ける賛美や祈り、信徒の交わりは、内なる「靈性」を養う秘訣です。

30

「わたしの口から出るわたしの言葉はむなしく、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす」イザヤ書55章11節  
言葉は生きています。自分が語った言葉は、いつまでも響き続けるのです。

私たちは、人が聞いていなければ、自分の言葉に責任を持たなくてもよいと思っています。すべて、自分が語る言葉は、その時だけのこと、と思い込んでいます。しかし自分が語った言葉はすべて、神の前に積み上げられています。その言葉の累積が、まさに自分自身なのです。

自分が語った言葉で自分自身を造っていくのです。自分が語った言葉は自分自身に返って来るのです。神を賛美する言葉はその人を清めます。神のみ心になわぬ言葉は、その人を汚すのです。人のために祈る祈り言葉は、自分自身の靈性を豊かにします。

31

「イエスは言われた。『それでは、あなたは、わたしを何者だというのか』」

世間には、ものごとについて事細かに分析し説明する評論家のような人が沢山います。それらの大方は、いずれかの書物から孫受けした知識にしか過ぎません。それはよいとしても、そのような知識をふりまわすことによつて、その事柄について「自分は知つた」と思い込んでしまうことは、大きな誤りです。ただ知識を持つということとは傍観者であつて、自分自身の生とは全く関係のないところに立つて虚しく言葉している人です。

宗教的実存に立つこと、つまり信仰人として生きるということとは、自分自身の全存在をかけて告白することにあります。言わばそれは命懸けの言葉を語ることなのです。それが、「あなたはわたしを何者だと言うのか」というイエスの迫りなのです。

32

「はつきり言つておく、あなたがたが、わたしの名によつて何かを父に願うならば、父はお与えになる。今までは、あなたがたはわたしの名によつては何も願わなかつた、願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」(ヨハネ16・23)

なんと率直で、畏るべき言葉でしょうか。「祈る」ということの重さ、特に「イエスの御名によつて祈る」ことの重さを、わたしたちは真実知っていないのだと言うことを、深く反省させられます。イエスの御名による祈りが機械的になり、軽々しく口先で唱える無表情な言葉になつている。本当に信じているのか。本当に祈つているのか、という問いを、イエス様から突きつけられました。イエス様と厳しく対峙しようと思います。この御言葉を正味徹底的な謙虚と畏敬の念をもつて戴き、祈る者となろう。

33 私たちがこの世に生きているのは、創造主である神を愛し、仕えるためであります。与えられた肉体、知識、技術は神の栄光のために用いるところにその意義と価値が生じるのです。またすべての個人的且つ社会的な人間関係とそこに生ずるすべての業の基本で、神に対する畏敬を欠くなら、それらがどれほど素晴らしく見えようと、所詮はこの世だけの一過性の虚しい出来事にしか過ぎなくなりす。なぜなら、そのままでは私たちの靈魂に利益をもたらさず働きとまらないからです。

自分に与えられたすべての賜物を、神の栄光のために捧げ用いようとするとき、その人の人生は光り輝きます。なぜなら、仕事の意味と同時に、生きる意義と目的とが明確になるからです。

やたら知識を得、富を得、肉体の健康を得ても、自分を生かしてくださっている神に対する感謝と畏敬の念が無ければ、すべては虚無と化します。

34 聖書の使徒言行録に記されているキリスト者達は、靈的に燃えて活き活きと生活しています。彼らが直面しているさまざまな苦勞は、今も昔も変わりません。しかし、彼らは、靈的に燃え、神さまを身近に感じて、信仰による希望と喜びとを持って生きています。彼らは何処からその靈的エネルギーを得ていたのでしょうか。

その秘訣は、「礼拝と祈り」にあります。「彼らは共に祈り神を賛美していた」という記事が、使徒言行録に度々出てきます。

神さまの愛の臨在感を彼らは何時でも覚えていました。神の働きの御手を生活の現場で感じていました。ですから、「礼拝すること」と「祈ること」を第一としたのです。

共に礼拝し、共に祈る時を努力して持とうとしないで自分の靈性を豊かにしようとする人は、働かずして富を得ようとする者と同じです。

35

イエスさまに関わることによつて、心身ともに変えられた人々の様子を聖書に見ていきますと、そこには共通のことがあります。それは、ただ自分の願ひのみでイエスさまに関わつたのではなく、イエスさまの願ひを信じて、自分をイエスさまの願ひにお任せするという信仰によつて関わっていることです。

信仰は、自分の信念で神さまを信ずることではありません。「自分の信念」などと言ふものは、自分の力みで、いつ変わるかわからない不安定なものです。信仰は自分の信念や確信ではなく、神さまの自分に対する願ひ（愛）に自分をお任せすることです。

信仰の根拠は、自分の理屈や知恵にあるのではなく、神の願ひ心（愛）にあるのです。その愛を素直に人が受け入れるところに、その人の信仰は成り立つのであります。

「わたしの兄弟たちよ、自分は信仰を持つていっていると、言う者がいても、行いが伴わなければ、なんの役にたつてでしょうか。そのような信仰が、彼を救うことができるでしょうか。」（ヤコブ 2・14以下） そのとおりだと思います。「信仰」か「行い」か、という分け方は理屈の世界だけの事であつて、現実には存在しません。現実にあるのは、紙に表と裏があつて一枚の紙であるように、信仰と行いとは切つても切れなないそのままでワンセットとしてあるのです。信仰と行いの問題を突き詰めていきますと、それは形と心の問題として集約出来ます。形の無い心は無く、こちらの無い形はないのです。心は必ず形となつて具体化し、形は心を表して本当の形となるのです。こころだけを大切にして形を蔑む者は、こころの何たるかを知らぬ者であり、形だけを大切にする者は、形の何たるかを知らぬ者であります。

「教会」の存在理由といふのは何でしょうか。それは、ただ一つ、神さまの愛を多くの人々にお知らせすることです。教会の使命はここにあるのです。

この世には、善き働きをする方々がおられます。また、いろいろな主義主張をひろ

めようとしている方がおられます。もし、教会がそれらの人達と同じであるなら、教会が存在する必要はありません。

教会の使命は、神さまの愛を伝え、人々の靈魂に喜びと安心を生ましめ、それぞれの人生を永遠の生に到る希望をもって生きぬく力を提供することです。イエスさまはそのことのためにだけ御自分の生涯を捧げられました。教会もその業の為にのみ、この世に存在しているのです。

38 「教会の礼拝」は、自分だけでなく多くの人々と「共に礼拝する」ことに、その働きがあるのです。「自分だけ」という思いは、利己主義であり「共にあろうとする」愛の関わりを破壊する悪魔的な思いです。

「教会の礼拝」を思うとき、それが必要か否かという、愚かな議論をするのでなく、「共に礼拝にあづかるために」はどのように各自があることが大切かということに、思いを向けることです。

教会（エクレシア）とは、党派性を克服した愛によつて現成する人間の究極的な在



り方の象徴であります。それ故に、それを「キリストの体」と聖書は申します。政治も経済も科学も文化一般も、その究極に於いて願う人間の在り方こそキリストの教会としてのエクレシヤなのです。教会であることが秘める意義は人類的な課題であります。

39

「自分を捨てる」とか、「断念」するとかいうことは、とても大切です。事実、どの人も、なんらかの形で、その程度は違いますが、ひそかに「自分を捨て」たり「断念」したりして生きているのです。だからこそ周囲との関係が平穩におさまっているのです。

自分の言いたいこと、したいことを我慢せずに進めて行きますと、忽ちにして家庭や社会に大混乱が生じてしまいますよ。

それにしても、わたしたちはときとして、「自分だけが耐え、断念しているのだ」と思ってしまう。しかし実際は、相手は勿論、自分を取り巻く人達は、それなりに耐えているのだということを知らなくてはなりません。結局、平穩とか幸福とか安

定とかいうことは互いに耐え、断念し、自分を捨てているところに成り立っているものなのです。互いにもう一度、相手の気持ちに思いを向けましょう。

40

「丸い卵も切りようで四角、ものも言いようで角が立つ」相手がだれであつても、言葉を交わす場合、優しいところが大切です。

「私は嘘をつくことが嫌なので、本当のことをハッキリと言わせてもらいます」と威張っている人がいますが、それは、人間関係の機微を弁えない勇み足というものです。勿論、ときにはハッキリと言わねばならないことがあります。何時もそれでは、一人との関係が破壊されてしまいます。

見え透いた「お世辞」や「嘘」は困りますが、相手に対するところがいかいとしての「うそ」は、愛の一つのありかたです。このような言葉使いは、とかく事実を非常にハッキリと言いつつ放つてしまう、夫婦とか親子とかの親しい間に於いてこそ必要とされることです。「愛はすべてを結ぶ帯である」と聖書は教えていますが、その愛を「ころ遣いのある言葉」に置き換えてみると、いろいろな反省させられます。

41 だれでも「安心」でいたいと思いますが、安心でいるということは、心配事が無くなってしまう状態ではありません。

人間生きていくかぎり、心配事はついてまわります。心配事があるということが生きていくことの証拠です。

「安心して行きなさい」というイエスさまの語りかけは、心配事がどれほどあっても安心していなさい、と言う意味です。それは、わたしも一緒にあなたの心配事を心配してあげましょうという「安心」なのです。

イエスさまと一緒にわたしの心配を心配してください、ということを知る時、心配が消えるのではなく、心配に立ち向かう勇氣と安心と希望とが与えられます。それは大きな喜びです。ですから、イエスさまを信じるといふことは、積極的な生き方をするのだと言えます。自分一人だけで心配に立ち向かおうとするなら、その人は決して深い安心を得ることはないでしょう。

42 人は自分を肉体だけの者であるかのように思っています。また、この世だけに生き

る者だと思つています。

そのような考え方から、やたらに「健康、健康」と騒ぎたて、これを食べればよい、このように運動すればよいなどということに熱心になります。

確かに肉体的な健康に配慮することは大切ですが、人間は肉体が健康であれば、すべてよいという者ではありません。私たちは肉体だけの者ではなく、魂（心）の者、霊の者なのです。またこの世だけに生きる者ではなく、肉体が無くなっても霊はいつでも生きつづける者なのです。ですから大切なことは、自分の魂にも、霊にも、肉体の健康に熱心になる以上の熱心さで配慮しなくてはなりません。このことを忘れてしまいますと、人は悲惨な結果を自分に招くことになってしまいます。「あなた方の霊も魂も身体も何一つ欠けたところがない者として神が守ってくださいますように」（聖書）

43 何かを自分の身につけたいと望むなら、繰り返しそれを行うこと以外にどのような方法もありません。つまりそうすることがその人の生活上の形になることによつて、

そのことがその人の身につくようになるのです。それを「習慣」にすると言います。その国の習慣とか、その村の習慣とか言われる事柄も、先祖代々決まりとしてその国、その村で繰り返し行われ引き継がれて来ることによつて、形づくられて来たものでしょう。また、個人に於いて教育効果を上げるためには、そのことがその者に習慣化させることです。

私たちが自分の靈的成長を望むなら、決まった時に、日常とは全く異なつた場所に自分自身を置く習慣を持つことが必要です。私たちにとつて、その習慣の一つが、毎週日曜日の朝に教会堂に自分を置いて礼拝をする、ということですが、正しい仕方です。この特別の時間を費やす人は、やがてこの時間の中から、自分の生活全体を豊かにする深い知恵と力とを、知らぬ間に自分の心身に受け取ることになつていくでしょう。しかし気まぐれでいい加減な関わり方をしている者は、何も得ることはないばかりか、生き方に混乱を来たしてしまいます。そういう人は神から何かを頂けると思つてはなりません。心が定まらず、生き方全体に安定を欠く人です。(ヤコブ1・7)

「あなたは自分が何を求めているか気づいていない」と言うイエスさまの言葉に、わたしたちは、なにかハッとさせられます。

いったい自分は何を求めているのだろうか。はつきりと分からないのだが何か足りない、なにか変だ、ということだけは感じている、というのが今の自分であるということはわかっている。しかし、そのような自分であることさえ、気づいていない人もいます。

自分が本当は何を求めているのか分からないから、私たちは迷うのです。そして、つい目先のものに手を出し、思いを向け、結局は満足出来ずにそれから離れ去ります。

「あなたの宝を納めるところに、あなたの心（あなた自身）がある」とイエスさまは言われますが、自分が自分として落ち着けるところに自分自身を置いていないからいつもわたしたちは、満足出来ず、あっちへ行き、こっちへ来、これでもない、あれでもないとうろろ迷うことになるのです。このような人達の様子を「迷える羊」とイエスさまは言われました。

人が安心と満足の人生を送るための第一の条件は、自分自身が心底なにを求めている

るのか、ということに気づくことであります。ではどうすれば、そのような自分に気づく事ができるのでしょうか。

45

わたしは彼らが熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい知慧に基づくものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようと、神の義に従わなかったからです。(ローマ信徒への手紙10・2以下)

「信仰」と「信念」とは違います。信仰の人は、神様からいただく真実に生かされる人ですが、信念の人は、自分がかたく思い込んだ念に生きる人です。

信念の人は、自分が正しいと思ひ込む念を固守して、それを貫き通そうとします。他の人にどれほどの害を及ぼしても、それには目もくれずに、むしろそうすることが正しい事だと信じているのです。信念の人は一人よがりの利己主義者で、自らを突き放して正しく反省することを知りません。

信仰の人はとても謙虚です。他者を思いやる心があり、けっして押しつけがましくありません。彼は、神の前にいつも反省し、神さまの全能を信じて、すべてに耐え

る人です。

信念の人は自分のために生きる独善の人であり、神も仏も、愛も正義も自分の念い込みを基本として行使する人です。

信仰の人は神の真実心に生きる愛の人です。信念の人は多く、信仰の人は少ないように思い、自分を反省いたします。

46 神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださいます。(ヤコブ手紙4・8)

何と明解な勧めでしょう。本当に、そのとおりだと思います。

自ら神に近づこうとしないで、どうして神に出合うことができるでしょう。自ら真実を求めようとしないで、どうして真実に出合うことができるでしょう。

近づこうとすることは、求めることです。求めることは、自分を相手に開けることです。

自分を閉ざしている者には、どのような新しい事も起こりません。自分を外部に向けて閉ざしている者の内面は、疑心の暗さが漂い、暗鬼の気が満ち、愚痴と恨みが増



大し、遂に自分自身を腐らせてしまふでしょう。

人が何に近づくかということとはとても大切なことです。悪魔に近づくなら、その人は悪魔に感化されましょう。悪魔に自分を開けるからです。

聖書は、神に近づきなさい、と勧めます。そうすれば、神は近づこうとした者に倍して、その人に近づいて下さいます。なぜなら、神の愛が人の愛に勝っているからです。神に近づくことを願った者だけが、神を知ることが出来るのです。神に近づこうとせず、傍観者でいるかぎり、その人は神に出合う事はありません。イエスさまは言われました「求めよ、さらば与えられん」と。

## あとがき

この冊子におさめた文章は私たちの集いが出しています。「週報」に記したものです。そのときどきに出来た余白に合わせて記したため、各文章に長短ができました。このたび、教友の瀬川知子姉がお忙しい中でワープロしてくださったものを、手作り冊子として一冊にまとめ「道しるべ文庫」に加えることができましたことは、とても有り難いことです。瀬川姉に感謝します。

一九九六年十月一日

松 下 昌 義